

出雲高校の皆さん、こんにちは！

私はアメリカで生まれ育ったアレックス・チェンと言います。大学卒業後に自分が育った国を去り、ただいま日本で元気に生きています。

アメリカといえば、皆様はどんなイメージが浮かびますか？

よく聞く話を上げると：土地が広い。車が多い。家がでかい。食事がでかい。人がでかい。日本では絶対ありえない高校生活。ニューヨーク。ディズニー。ハリウッド映画。心配するほど皮膚がオレンジ色の政治家。英語。英語。英語。

そういえば、「英語アレルギー」を持つ日本人が多いと噂をしょっちゅう聞きます。本当の話なのかわかりませんが、私がなんとなく共感できる話です。

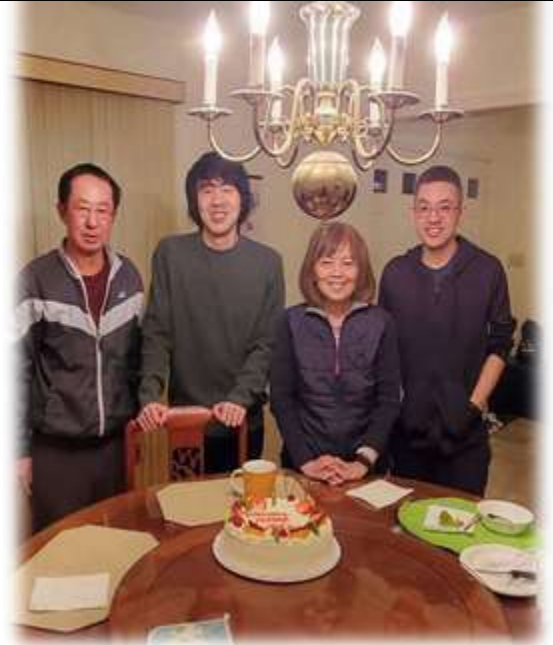
自分も実は、言語がすごく苦手でした。

アメリカにずっといた私は、当然ですが英語は自然に身につきました。ただ、自分にとっての「外国語」にふれる機会も色々ありました。

私の両親は台湾出身で、社会人になってからアメリカに移住した 2 人です。それから自分が生まれ、そのままアメリカで生活してきたので、自分のアイデンティティはどちらかということ「アメリカ人」になりました。ただ台湾で育った両親は、台湾の国家言語である中国語が母国語なので、自分の家は中国語の環境でした。

親 2 人と中国語で会話することである程度習得しましたが、言語を家でしか使わないとネイティブのように身につけることは意外と難しいです。家族との日常生活で使う言葉が限られるし、読み書きもできないので、長年一緒に暮らしても自分の中国語レベルがかなり中途半端でした。なので、「家族の言語だからちゃんと習得した方が良い」と思ってくれた両親が、私を中国の塾に行かせました。これでもう心配はない。塾まで通って数年間学習すれば、ネイティブのようにうまくなるいわげがないですよ。...結果、10 年以上中国語塾に通っても、中国語が下手です（泣）台湾に遊びに行くとき、コミュニケーションが難しい。テレビを見るとき、半分ぐらいしか聞き取れない。親戚と会話するとき、伝えたいことが伝えられなくて残念な会話しかできない。いろいろ残念すぎる。

アメリカ人ながら、こんな家庭で育ちました。



何がだめだった？

今の私があのかつきを振り返ると、上達しなかつた理由がわかります。とてもシンプルに、中国語を本当に勉強したい！という強い気持ちになつただけです。中国語塾に通うのも自分の選択じゃなかつたし、先生に怒られないように最低限の勉強しかしなかつたです。それぐらゐの努力だと、クラスで覚えたことをすぐ忘れるし、何年経つてもペラペラにならないことは全然おかしくないです。

日本の学校には「ずっと英語勉強してるのに全然できない...」と思つて、自信をなくしてしまう人がすごく多いと思ひます。そういう人には、実力の問題や、個人のせいじゃないことをわかつてほしいです。多くの学校では、試験を合格したり、進学をするための勉強法が優先されています。こういう勉強法だけでは、「英語で楽しくコミュニケーションを取る」という別のスキルがなかなか身につかないのが事実です。悲しい話ばかりしてしまいましたね。そろそろポジティブな方向に変えましょう。

じゃあ、言語はどう勉強したらいい？

...と思つてる方も多いかと思ひます。私は約 18 年間言語で苦戦しましたが、それがあるとき急に変わりました。

アメリカでは、日本という国は結構人気があります。日本といえば「ポップカルチャーが盛んな国」という印象が強くて、ゲームやアニメ、侍や忍者、ゴジラやロボットというイメージがよく浮かびます。大体の人の知識がそこまでですが、なんとなくかっこいいイメージがあると思ひます。私も子供のときからそういうイメージを持ち、いつか日本で旅行したいと思つていました。大学生になったら日本語の授業を受ける機会があつたので、割と軽い気持ちで挑戦してみました。過去に言語でいろいろ失敗してきた私が日本語ペラペラになるのを全然想像できなくて、「旅行するとき簡単な会話ぐらゐできたらいいかな」と思つて学び始めただけです。

すると、2 年生のときにとつても重要な出会いがありました。日本から来た短期留学生と何人か出合つて、友達になりました。向こうが片言の英語を使つて、こっちが片言の日本語を使つて、不器用ながらもコミュニケーションを取れました。2 週間ぐらゐしか一緒にいながつたけど、限られた時間でたくさん遊んで大満喫しました。ようやく帰りの日がやつて来たら、涙を流しながらお別れしました。また日本で会おう、という約束もしました。

自分はそのときまで違ふ国の人と友達になつたことがなかつたし、「人は言葉とか文化が違ふすぎたら仲良くなれないだろう」という思い込みもあつたので、こうやつて留学生たちと仲良くなれたのがとつても貴重な経験でした。これで急にやる気が爆上がり、日本語を一生懸命勉強しようと思ひかけにもなりました。

そのときから、私の言語アレルギーが治りました。

「積極的に人とコミュニケーションを取つて仲良くなりたい」という目標があれば、語学がすごく楽しくなります。勉強というより、趣味のような時間になるし、上達するとすごく達成感を味わひ、さらにモチベーションが出ます。（逆に「勉強しないとテストがやばい..」という目標だと、絶望しか味わえないですよ..）

留学中の私です。友達と伊勢神宮のパワーを感じに行きました。



私はそうやって勉強を続け、更に上達するために日本で留学することにしました。いろんな説明会に足を運んで、数ヶ月かかる申込みのプロセスを我慢して、ビザを申請して、日本での部屋を必死に探して、頭が痛くなる多くのハードルもありましたが、それを超えたら人生初の日本生活をスタートしました。

留学は、一言でいうと、人生の転機でした。

当然、コミュニケーションで失敗することがあった。マナーを守れないこともあった。電車を乗り間違えて死ぬほど迷うこともあった。自転車で事故りそうになることもあった。飲み会で先輩に敬語を使い忘れて怒られることもあった。（本人が忘れるぐらい飲んでたからセーフだけど）

失敗はあったけど、すべてが学びでした。毎日新しい気付きがあって、過去に味わったことのない成長と達成感がありました。恥ずかしいことがあっても、元々ネガティブだった自分がポジティブに考えられるようになりました。何よりも、一生忘れられないほど楽しい経験でした。

留学はたった半年という短い間でしたが、毎日人と喋ったり友達と遊ぶことで日本語力が一気に伸びて、「言語が苦手」のマインドをようやく卒業しました。新しい言語をゼロから習得して、海外で友達を作って、育った国から地球の裏にある日本での生活に慣れて、想像できないほど自信が付きました。

その後はどうなった？

少し話を早送りすると、私は留学を終えてアメリカに帰って、大学を卒業して、日本で就職することにしました。母国に住み続けるより決して楽な方じゃなかったけど、海外生活で得た刺激をもっと味わいたくてそうしました。

ちなみに初めての就職先は、皆さんの出雲市でした。そこで出雲高校を含めていろんなところに関わらせてもらいながら充実した3年間を過ごしました。

そこから東京でしばらく暮らしてから、今住んでいる京都に引っ越しました。気づいたら日本での生活が7年を超えています。大変なことも数えられないほどありましたが、それがあったからこそ今の自分が充実した生活を送れていると思います。



出雲で3年滞在してから旅立つ私です。空港でしまねっこたちが見送ってくれました。

まとめ

自分の経験についていろいろ書かせてもらいましたが、皆さんに一番伝えたいメッセージは、「英語を勉強して海外に行け」ではありません。

伝えたいのはただこれです：新しいことにたくさん挑戦してください。苦手なことであっても、「自分は向いてないだろう」と思うことであっても、チャレンジするだけで学びがあるし、自分のことをもっと知る機会になります。

自分の場合、言語と海外生活に挑戦することで人生が変わりました。それがただの一例ですが少しでも参考になれば私はとても幸せです。

失敗を恐れずに、やりたいことに向けて頑張っていて、自分にとって一番楽しい生活を手に入れてください。私は全力で応援しています！

Alexander Chen さん プロフィール

1992 年生まれ。2013 年に日本へ初めて留学。その後 2015 年に出雲市国際交流員として来日。課題研究の原稿作成で出雲高校の生徒と関わる。現在は京都市在住で、日系企業でアプリ開発と通訳の仕事をしている。



ニューヨークにいる私です。

Global Report 担当者 所感

今回の Global Report は出雲市役所で以前働いていらっしやった Alex さんをお願いしました。ここには Alex さんが書いて下さった日本語そのままを掲載しています。直接お会いしたことはないのですが、とても気さくでバイタリティあふれる方という印象を受けました。

私も言語との出会いで人生が変わった 1 人です。Alex さんの想いにひとつひとつ共感しながらこのレポートを拝読しました。そして、「数々の失敗を経験したことでネガティブなこともポジティブにとらえる姿勢が身についた」という言葉にはとても心打たれるものがありました。

私が最近気になっている言葉に「ネガティブ・ケイパビリティ」というものがあります。決まった日本語訳はないのですが、「不確実で答えの出ない事態に耐える力」と解釈されています。もう少し噛み砕くと「もやもやする気持ちを受容しながら生きる」ということでしょうか。「課題解決力」のように物事に答えを出そうとする「ポジティブ・ケイパビリティ」とは相反する概念としてとらえられています。高校生の皆さんも自分自身や将来に対して、不安を感じたり悩んだりすることの連続だと思います。何かしようとしても絶対に成功するという保証はなく、行動しても失敗に終われば痛みを伴う。しかし、その事実を抱えながらも Alex さんのように歩みを進めた先に、何かしら克服の芽やヒントが現れるのかも知れません。性急に結論を出さずとも、わからないものを携えたまま宙ぶらりんの心で進み続けることにも価値や意味があるのだと思います。Alex さんの体験談が物語るように、その「もやもや」は途上で発酵して、後に振り返ると自ずと意味づけできる時がきます。一見ネガティブに思える「答えの出ない待つ時間」は、後に予定調和をこえる本当の学びをもたらす可能性を秘めているのではないのでしょうか。（荒川 宏子）